

2008 年度第 3 回ポスト冷戦研究会・シンポジウム

2008/07/19(土) PM01:30~06:00

明治大学・リバティータワー9階 1095 教室

涌井秀行

アンドリュー・E・バーシエ(山田鋭夫訳)『近代日本の社会科学, 丸山真男と宇野弘蔵の射程』をめぐって

本書の核心は「後進資本主義——ドイツ, ロシア, 日本に共通に見られる developmental alienation である。訳者はこれを『発展的疎外』とそのまま訳している。・・・著者の本意ではないが『ゆがんだ発展』で, ほとんど理解できる。『先進国の無言の脅威下での歪んだ発展』でよいだろう。それは現実面では山田盛太郎が指摘した農村等の後進性であるが, 意識面では, 一方で明治期の国権主義の思想・制度となり, 他方ではこれへの批判を西洋思想に求めるものとなっていく。市民社会論者は, 市民社会未発達ゆえのゆがんだ発展としてとらえる。それは平田のように, 市民社会なきソビエト社会主義への批判ともなっていく。」(伊藤光晴(書評)「近代日本の社会科学, 丸山真男と宇野弘蔵の射程」

「毎日新聞」07年5月13日)

論点の提示

(1) 方法論の問題 (世界システムの理解における宇野三段階論の今日的意味)

154 頁~160 頁「(小見出し) 現在からの呼びかけ」をめぐって

(2) 戦後日本資本主義の「後進性」の問題 (丸山真男「原型」「古層」理解)

99 頁~111 頁「(小見出し) 山田のテキスト, 批判と評価」をめぐって

(1) 方法論

『資本論』はなぜ書きかえられる必要があったか。この問題は一見するほど明瞭でない。・・・ヒルファディングが行ったと考えられているように、『資本論』は拡張されるべきものだったのか。・・・ベームヴェヴェルクが要求したように『資本論』は内的に矛盾していると攻撃され、それゆえ放棄されるべきだったのか。・・・『資本論』には何かがなされねばならない・農村分解に関する宇野の分析は、一九世紀後半のこととして、資本主義はどこでも旧社会形態の完全なる解体をもたらすものではないことに気づいていた。「資本主義の組織化と民主主義」という一九四六年論文は、資本主義の大規模な集中化と国家介入に焦点を当てた。・・・現状分析の例である。それ

らは歴史を扱っている。だが『資本論』は歴史なのか。宇野にとって答えは否である。資本主義はその一九世紀中葉の形態において、足かせのない純粋な作用にかつてないほど接近した。・・・「経済」ないし(下部)構造が自己完結的、自己充足的、自己発展的、自己、永久化的なシステムとして、要するに自己自身に対する主体/客体として機能しうるほどに、人間関係は単純化され物化された。そういうものとして資本主義は、最小限の法的装置を必要とするのみであった。・・・かくも顕著に社会関係の商品化が進んだので、新しい政治経済学を基礎づける資本主義の抽象的客観的モデルを考えることができるようになった。宇野にとっては、これは『資本論』が達成し

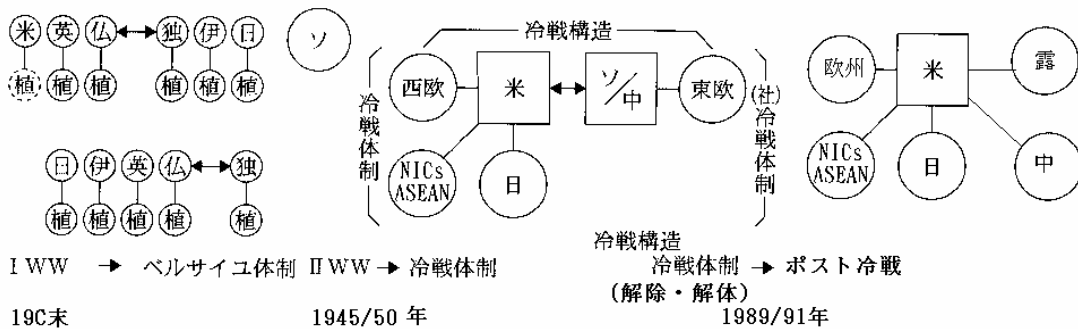
たことであった。『資本論』は純粹資本主義の理論モデルであって、その形成や発展についての歴史記述ではない。宇野いわく、マルクスは「ちょうどいい時に仕事をした」、と。(132-133 頁)

指摘するにとどめますが、結局、経済学においてなにを研究するかということを選択するのは、経済学そのものではない。研究の方法は厳密に実証的で論理的でなければならないが、どういう課題を科学的に研究するかは、経済学の中から出てくるのではない。

価値判断の中から出てくる。

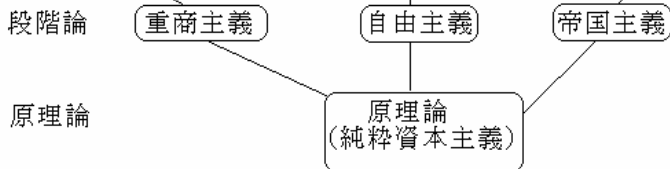
未完の著『資本論』の「完成」(宇野流に言えば「原理論としての純化」?)は魅力的な仕事なのだろうが、完成したとしてもそれを演繹して行けば現代の諸問題・難問を氷解・解決できるということにはならないのではないか。

大岡昇平は小林秀雄について次のように述べている「小林は日本の戦争が侵略戦争であるかないかに・・・興味はなかった。興味があったのは、・・・たとえば自分を捨てて国に尽くすこととか、そうした勇気とか、決断力であった。」



宇野三段階論模式図

現状分析 各段階における世界全体ないし各国資本の現状の実証分析



===現代社会を総体理解したいという願望と関わりますが、===

【設問】：アメリカの単独行動主義 (1991 湾岸戦争～ユーゴ紛争 (空爆) ～アフガン～イラク)

||

93年クリントン/95年～ニューエコノミー (情報・金融 (株高) 革命＝バブル～住宅

【解答】限定＝方法論

レーニン『帝国主義論』一國分析の枠組み→世界システムとして第1次世界大戦を理解  
帝国主義論ノート（構成の変更）、資本論の「純化」ではなく、生産の集中集積→独占体  
（必要最小限の原論の彫琢・陶冶・・・）現実の革命の中で「これ以外なかった（価値判  
断）」

Ⅱ 大戦後以降の世界理解 冷戦構造(冷戦体制対抗)→1989/91年 溶解＝ポスト冷戦  
（前の時代の名前で現代を命名せざるを得ない）

（2）戦後日本資本主義の「後進性」（特殊性）の問題

山田の「後進性」特殊のとらえ方

（99頁）『分析』はどんな種類のテキストなの  
か・・・まことに『分析』は、明白なる道徳的  
情熱の書であり、働く人びと一近代的利己だけで  
なく半封建的過酷の犠牲者一を搾取し疲弊させる  
システムに対する冷徹な怒りの書である。そこに

は後進性という心理的傷跡がある。山田は再三再  
四、日本型資本主義の「顛倒的」で「畸形化」し  
「萎縮」し「野蛮的」な性格を非難する。『分析』  
をして日本社会科学の古典たらしめたのは、この  
怒りを理論へと昇華させていった技にある。

丸山の「後進性」特殊？のとらえ方

（265頁）吾々は現在明治維新が果すべくして果  
しえなかった、民主主義革命の完遂という課題の  
前にいま一度立たせられている。吾々はいま一度  
人間自由の問題への対決を迫られている。もとよ  
り、日本の直面している事態は、近代的自由の正  
統的な系譜をあらためて踏みなおす事で解決され  
る様な単純なものではない。「自由」の担い手はも  
はやロック以後の自由主義者が考えたとき「市  
民」ではなく、当然に労働者農民を中核とする広  
汎な勤労大衆でなければならぬ。しかしその際  
においても問題は決して単なる大衆の感覺的解放で  
はなくして、どこまでも新しき規範意識をいかに

大衆が獲得するかということにかかっている。こ  
のように丸山にとっては、民主主義は大衆におけ  
る政治的主体性の覚醒をとまなうものであった。  
彼の見解ではこれは、「新しき規範意識」と足並み  
をそろえることなしにはありえなかった。ひるが  
えってそれは、広い意味での学問からの強力なコ  
ミットメントを要請するだろう。つまり政治の民  
主化は学問の民主化を要請する。そうした努力を  
していく点において、これまた広い意味での社会  
科学は決定的に重要であるはずだ。明らかに丸山  
は、ヨーロッパおよび明治の啓蒙思想の自覚的な  
相続人であった。

（279頁）日本は、丸山が構想したような意味で  
の民主主義にはならなかった。だがしかし、この  
失敗は避けられないものでなかった。また、一九  
四〇年代後半の冷戦下で二極化した「現実主義」  
は、これにつづく何十年かのナショナリズム的経  
済主義とともに、彼を深く幻滅させるものであっ  
たことは間違いない。以前にも若干の兆候はあっ

たが一九六〇年代半ば以降、丸山の明白な関心は、  
現代的というよりも純歴史的なものへといつそう  
傾いていった。彼は日本と外部世界の間の「文化  
変容と文化接触」の歴史に焦点を当てるようにな  
った。「コトバの『翻訳』の問題をふくむ観点の導  
入は、普遍史的な発展段階論の否定を伴わずには  
いられなかった」。こうした転換と並行して、丸山

は日本の政治的・歴史的・倫理的意識の「古層」の  
のちには執拗低音と呼ぶものを探求するようにな  
つた。  
こうしたものは、諸段階を通ずる不可避的一場合  
によっては弁証法的一な進歩とといった物語に  
よって図式化するにはまったくなじまない、と彼  
は見た。日本人の意識が「永遠の今」を奉る傾向  
を克服し、最終的に「普遍性」へと飛躍する潜在  
アンダーラインは引用者（涌井）

的可能性について、丸山はますますもって悲觀的  
になっていったように思われる。「普遍」と日本に  
とって「外的」なものとの同一視を、彼は嘆きつ  
づけた。日本は定義によって、また救いがたいま  
でに「特殊」なのである。それゆえ、のちになっ  
て丸山が日本人の歴史意識の「深部」へと回帰し  
たことは、彼の魔術からの解放の一契機だと見る  
のが適切であろう。

最後の仕事として丸山の「古層論」

1972年11月に「歴史意識の古層」として発表され、その後「原型・古層・執拗低音」（初出、1984年）等に引き継がれていった一連の考察

例えば丸山は「執拗低音（バツ・オスティナート）」という音楽用語を用いて、日本文化の特質を表現した。

オスティナート *ostinato* イタリア語

音楽用語。ある一定の音型を同一声部で何度も繰り返す手法。低声部に置かれたものをとくにバツ・オスティナート（固執低音）とよぶ。13世紀中ごろに現れたが、とりわけ16世紀中ごろから18世紀にかけて好まれた（シャコンヌ＝バッハのシャコンヌ（パルティータ第2番最終楽章[注記]）、パッサカリア、フォリアなど）。また、変奏曲形式と結び付いたり、ラベルの『ボレロ』のように、リズム面に応用されたりするものもある。執拗に繰り返される低音主題の上声部で、連続して様々な変奏が展開される古典的音楽形式のことを総称して固執低音と呼ぶ。固執低音そのものは確固としたメロディを持たず、その上で変奏される主旋律を支える役目のみを担いが、変奏される主旋律は次第に執拗低音の影響を受け時には大きく変質させられ、独自のメロディを奏でることになる。この音楽を変質させる聴こえざる力＝執拗低音こそが、執拗低音による音楽の本質となる。

[注記] パルティータ第2番ニ短調 BWV1004

257小節に及ぶ長大な「シャコンヌ」を終曲に

もつこのパルティータ第2番は、この曲集の

頂点の一つを形成するものである。

Allemande

Courante

Sarabende

Gigue

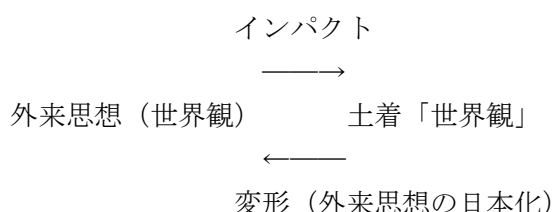
Chaconne

つまり丸山は日本文化の本質は執拗低音としての文化であり、そこへ入ってきた別の主旋律、例えば儒教・仏教・西洋思想などを変奏することで、「日本らしさ」を形成してきたのだと結論づけた。曰く、「端的に言えば、この国の歴史のなかから完結的イデオロギーとして「日本的なもの」をとり出そうとすると必ず失敗する、しかし、外来思想の「修正」のパターンを見たらどうか。・・・その変容のパターンはおどろくほどある共通した特徴がみられるという一点に尽きる。」（丸山眞男「原型・古層・執拗低音」『丸山眞男集』第12

卷，岩波書店，1996)153頁。

以下のパラグラフは田口富久治「丸山眞男の『古層論』と加藤周一の『土着世界観』」(『立命館大学・政策科学9巻2号』2002年1月)

加藤が日本の「土着的世界観」というキイ概念をもっとも体系的に展開しているのは、『序説』の序論にあたる「日本文学の特徴について」「世界観的背景」と「特徴相互の連関について」の項目(ちくま学芸文庫版で、上巻34～46頁)においてである。(要旨は日本人の世界観の歴史的な特徴は、土着の世界観の執拗な持続と、そのために繰返される外来の体系の「日本化」によって特徴づけられる、というもの)、これを図式化すれば、つぎのようになる。



こうして日本文学史にその背景としてあらわれる思想(文化)のタイプは、外来思想、「日本化された」外来思想、そして土着思想(それは理論的でも抽象的でも表面的には「体系的」でもないから、世界観にカツコをつけて土着「世界観」とすべきであったろう)の三種であり、それらの複雑な相互作用(interaction)というよりはトランザクション(transaction デューイ・ベントレイの用語)30)として日本思想は展開していくことになる。なお、加藤の比較的初期の「雑種文化論」は、丸山の「古層論」の吸収を媒介として、より立体化され、動態化されて、「土着世界観」概念へと彫像されていったとみることができる。

改めて日本の後進性(=先進性)=特殊性をどう見るか。

戦前『分析』

軍事的半封建(=半農奴)的資本主義

I 軍事重化学工業

II 絹綿二系統軽工業

----- (土台 こういうとまずいのだが)

(地主→) 半封建的土地所有=半隷農(=半農奴)的(←小作農)

「農地改革」

戦後 零細(地片)農地所有(農地)=零細都市宅地所有(資本・企業の大土地所有)

無価値の土地を資本に見立てる

||

戦前戦後の日本資本主義を貫く固執低音=執拗低音(丸山流に言えば・・・)

固執低音=零細土地所有=半隷奴的零細耕作

## 寺出道雄

モダン都市東京(モガ, モボ)→エログロ・ナンセンス  
日本における近代化・工業化の限界を指摘した『分析』は、そうした、日本の近代化・工業化の限界の中でのみ評価されるべきではない。それは、『分析』という根底的な批判を生みだし得たほどの、日本資本主義の発展の表現でもあった。『分析』は、その底辺に、「細民」が充満する「貧民窟」をなお残存させながら、その頂点に、華やかなモダン文化を開花させた、当時の「モダン都市東京」の、複雑な性格の産物でもあった。関東大震災後、東京の都心では高層ビルを建設する重機のハンマーが大きな響きを上げ、建設途中のビルディングの鉄骨や鉄筋の異様な姿は、人々に新しい時代の到来を意識させた。若い有能な建築家たちは、新たな高層建築でその美的感覚の鋭さを競った。隅田川に架け替えられたいくつもの鉄骨橋は、江戸好みや明治好みの老人たちを驚嘆させたり落胆させたりした。しかし、その鉄骨橋に、新しい、力強い美を見いだした若者たちも多かった。彼らの中には、その鉄骨の美を、写真というこれまた新しい美の形式で確認する人もいた。高層ビルの完成につれて、新たに開通した郊外電車に乗って郊外から都心に通勤し、  
山田『分析』の衝撃

進んでいない＝遅れをえぐりだした事＝遅れているが故に進んだ＝だが限界がある

===今と置き換えても違和感がない===

アメリカ社会学の文脈

A・ゴードンによる整理 A・ゴードン編, 中村政則訳『歴史としての戦後日本』上

C・ジョンソン「日本は 20 世紀を体験する過程で官僚国家による支配を特徴とする独特な資本主義体制を編み出した。」(22 頁)

R・ドーア「日本の社会構造は通常近代化に向けての発展の普遍的モデルとされている欧米の動向と異なる様相を頑(カク)なに維持してきた。」

==戦後日本資本主義==

(1) [戦後日本資本主義の擬似封建的性格 1——土地の擬制資本化＝外資代替]

(2) [戦後日本資本主義の擬似封建的性格 2——格差系列＝編成支配]

(3) [戦後日本資本主義の外生循環的性格 ——対米依存]

戦後日本資本主義の基本的性格は、以上の 3 点を内容とする [国内での内部応答的な再生産構造未確立, 外需(輸出)を再生産の必須条件【基本構成】] とする資本主義

＝【外生的擬似封建的資本主義】

基本構成・蓄積メカニズムの核としての【零細土地所有】(農地はここではふれない)

の都心のオフィスで働く「サラリーマン」の姿は珍しくなくなった。その「サラリーマン」にまぎって、若い女性たちも、電話の交換手やタイピストとして忙しく働いていた。彼らは新聞を読み、より知識欲が旺盛なら総合雑誌を読み、やがてラジオを聴くようになった。そうした生活を送る、新中間層の人々の数自身が、高等教育の拡大政策や中等教育の普及によって、増していった。社会のエリートになろうとする若者たちの間では、受験地獄が深刻化していきもした。新中間層のみでなく人々一般の娯楽の王者は映画だった。人々は洋画の中で、ヨーロッパやアメリカの大都市の姿に触れた。マイカーの時代がやってくるのは第二次世界大戦後だが、円タクという形で自動車の姿は珍しくなくなっていった。まだ珍しかったとはいえ、空に飛行機や飛行船が飛ぶようになった。都市のモダニストたちは、大震災からの復興が進んだ 1920 年代の末には、自分たちがアメリカやヨーロッパの人々と同じ生活をしていると感じていた。

寺出道雄『評伝日本の経済思想, 山田盛太郎』(日本経済評論社, 2008 年) 127-128 頁。

都市の【零細土地所有】（小規模住宅地所有）の種もアメリカによってまかれた。

1945年11月24日 GHQ「戦時利得の除去及び国家財政の再編成に関する指令」

1956年地価騰貴（投機）元年

■蓄積の培養容器＝地価上昇→含み益（キャピタル・ゲイン）の発生（オフ・バランス）

「含み益『担保』大独占系列融資」・中小零細「土地担保融資」赤字経営のバッファ

■勤労者【零細土地所有＝小規模宅地所有】→銀行（大独占）への利子（勤労所得）還流，  
所得再配分 VのMへの再転化

この蓄積メカニズム【含み益】＝擬制資本が外資（アジア NICs・中国）代替

特殊後進性 → 普遍化はどの様になされるべきか（諦めない）

アジア資本主義

アジア資本主義を媒介にして戦後日本資本主義を欧米資本主義 接続する

欧米資本主義の特殊類型(ラスト・ランナー)としての戦後日本資本主義ではなく，アジア資本主義のトップランナー（＝という捕らえ方）

アジア資本主義＝国境という枠組みを取り払った（国内での生産＝消費という前提を排除した）ところに成立する 20世紀最後の四半世紀に登場した資本主義＝外生循環構造

外からの資本主義発展の道（下からの資本主義発展の道：英 アメリカ

上からの資本主義発展の道：ドイツ・ロシア・戦前日本）

日本——アジア NICs——中国（沿海部）

＝レギラシオンの文脈で言えば＝

フォード的蓄積様式：国境内での生産と消費（労働者の賃上＝成長「蓄積」）高度成長期の資本主義は，クローズドな国民経済の枠組みの中で労働組合の団結権＝団体交渉権を背景に高い賃上げを実現し，それが内需（個人消費）を拡大し生産拡大につながるという好循環を形成。〔労働者の所得上昇＝資本の成長・蓄積〕

機械制大工業：（少品種）大量生産

↓ 国境の溶解

〔労働者の所得上昇≠資本の成長・蓄積〕機能障害・不全 グローバル経済（国境溶解）の枠組みの中では，逆に国際競争力を阻害する高コスト要因に転化

最終消費者は国境外に＝蓄積にとって不可欠となる輸出

（もともと 1970年代のスタグフレーション理解のための論理構成）フォード的蓄積様式の終焉＝これに代わる発展の生産様式（ポスト・フォーディズム／ボルボイズム／ネオ・フォーディズム＝トヨタイズム）が模索される。